

# 保育カンファレンスは保育者に何をもちたらすのか

— PAC 分析に基づく探索的研究 —

○小松和佳<sup>1</sup>・玉瀬友美<sup>2</sup>・野中陽一朗<sup>2</sup>

(<sup>1</sup>高知大学大学院・<sup>2</sup>高知大学教育研究部人文社会科学系教育学部門)

## 問題と目的

保育カンファレンスの場で、保育者は省察を行っている。保育カンファレンスにおける保育者の省察に関する研究では、意識や語りが変容した保育者個人に焦点を当てていた(e.g., 名須川, 1997)。そこで、小松・玉瀬 (2016) は、保育カンファレンスにおける保育者の語りのプロセスを検討し、他者との語りを通じたチームとしての省察過程を明らかにした。

小松・玉瀬 (2016) が実施した保育カンファレンスの中には、他の保育者の語りに影響を及ぼす保育者 A の存在が見られた。保育カンファレンスは、他者との語りを通して互いに看取し合うことで省察を行っている。つまり、保育カンファレンスが保育者 A に与えた影響に着目することにより、保育者の省察を促す一側面を明らかにすることができる。そこで本研究では、保育者 A に焦点を当て、PAC 分析を用いた個人の語りに基づき、保育カンファレンスが保育者に及ぼす影響に関して探索的な検討を行うことを目的とする。

## 方法

**対象者** 保育カンファレンスに参加した保育者 A (30 代女性, 保育経験年数 14 年)

**連想刺激** 「昨年度から今年にかけて、合計 10 回の保育カンファレンスを行ってきました。10 回の保育カンファレンスを通して、何か得たものはありますか。また、自分自身の課題は出てきましたか。頭に浮かんできた言葉やイメージを、順番にパソコンに打ちこんでください。」と口頭とパソコン上で教示し、連想反応を得た。

**手続き** 各項目間の記録と重要度順の並び替え、類似度評定等は、PAC 分析を支援する PAC-Assist2 (土田, 2016) を用いて、パソコン上で作業を進めた。その後、デンドログラムを基にしたインタビューを約 1 時間行った。

## 結果

保育者 A からは、連想反応 10 個に基づく、3 つのクラスターが見出された (Figure 1)。

クラスター1は、〈紡ぐ語りから見えること〉と命名した。“自分が捉えた場面と他の先生が捉えた場面とを出し合って、つなげていくことによって、ひょっとして子どもって、こう思っていたのかなってというのが見えてくる”と語るように、保育者 A は、他の保育者と語りをつなぐことは、より子どもの心に近づくことであると理解していた。

クラスター2は、〈鍛えたい子どもを捉える目〉と命名した。“子どもの動きに焦点を当てて、状況もそうですけど、その場面とか状況から、判断をするっていう(略)それを養うということは、すごく重要なのかなって思います。”と語るように、保育者 A は、もっと深く子どもを見取りたいと思っていた。

クラスター3は、〈実感した若手保育者の成長〉と命名した。“私とかミドルとか、〇〇先生とか、リーダーの視点がそこに入ってくるので、自然と若い先生の視点が増えていく”“第3クラスターは、グループとして成り立っていく。場を共有することで生まれるっていうか”と語るように、保育者 A は、若手保育者が成長していくことを実感していた。

## 考察

保育者 A は、子どもを捉える目を鍛えることで、さらに深く保育を見取る語りとなること、それらの語りをつなぐことにより、より子どもの心に近づくことができることを実感していた。また、保育者 A は、自分達の語りや、若手保育者の成長を促すことから、保育カンファレンスは若手保育者をチームとして援助する場と捉えていた。そのため、保育者 A は、若手保育者の成長には、自分達自身が、保育を捉える目を鍛え、保育を語っていくことの必要性を実感しており、それを自分自身の課題としていた。

保育者の省察には、保育者のより深く保育を見取っての語り、自分達の語りや、他の保育者の省察を促進させ、成長を促すことへの認識が重要なものとなる。

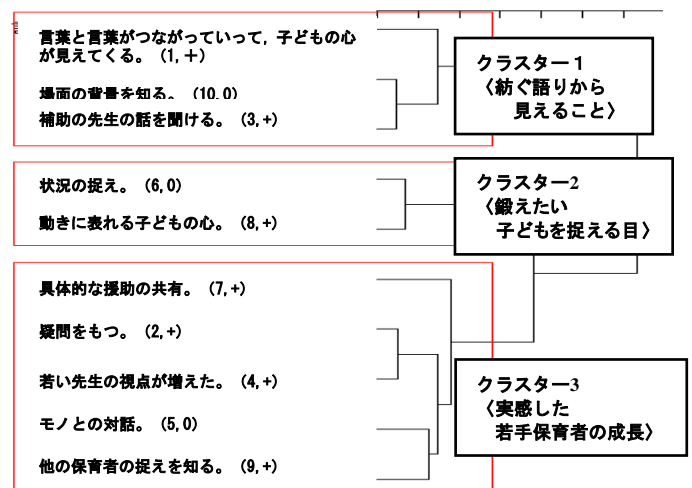


Figure 1 保育者 A のデンドログラム